



7月号

# 学校だより

平成29年 7月 1日

さいたま市立植竹小学校

〒331-0813 さいたま市北区植竹町2-1

TEL 048-663-7627

FAX 048-663-9885

児童数 1年126名・2年138名・3年123名・4年134名・5年125名・6年137名・7組18名 計801名

学校教育目標

○すすんでまなぶ子

○たすけあう子

○げんきな子

## 未来につなげる子どもたちの学び

校長 鯨井 幹夫

今朝も「おはようございます」という元気な声とともに、正門前に笑顔が広がっていました。下を向いて歩いていた子どもも思わず顔を上げ、あいさつを返します。児童会や代表委員による「あいさつ運動」は、今年から回数を増やすとともに、クラスごとに順番で全員参加の「あいさつ運動」を行うようになりました。また、国際ボランティア委員会の児童も6と8の付く日をハロー（8・6）デーとして、英語で朝のあいさつ運動に参加しています。あいさつは基本的な生活習慣でもあり、最も初歩的なコミュニケーションツールでもあります。これは不易のものであり、子どもたちにしっかりと身に付けておいてほしいことです。社会性や思いやり、がんばり抜く姿勢などと一緒に、学校でも家庭でも繰り返し教え、体験を通して身に付けさせるようにしていく必要があると考えています。



さて、この春、新学習指導要領が改訂され、これまで重視してきた「何を学ぶか」だけでなく、主体的・対話的で深い学びを重視した「どのように学ぶか」という学び方に加え、「何ができるようになるか」という育成すべき資質・能力の明確化が図られました。教育が「教える」ことと「育てる」ことであれば、知識などは「教える」こと、「何ができるようになるか」は子どもを「育てる」ことです。過日、新聞読書欄でトニー・ワグナー著の『未来の学校 テスト教育は限界か』の紹介記事を見つけました。その中で、著者が行った企業経営者たちへのインタビューで驚いたことは、21世紀に求められる働き手の資質として、「専門的知識の有無」がまったく挙がらなかったこと。そして、共通して重要とされたのが、次の3点でした。「**的を射た質問をする能力**」、「**相手の目を見て対等に議論できること**」、「**他人と協調しながら仕事を成し遂げる能力**」。これらは、「何ができるようになるか」であり、一つの教科で身に付けていくことではありません。要約したり、説明したり、討論したりする言語能力や、情報を活用する能力、問題を発見し解決する力などをはじめ、これからの社会を生き抜く力として、どの教科でも繰り返し学び、できるようにすることが求められています。そのことを踏まえ、現在、本校においても研究を進める中で力を入れているところです。

片や、「非認知能力（スキル）」というものもあります。「粘り強く取り組む力」や「忍耐力」、「社会性」や「自尊心」など、直接学力とは関係ないもので、最近欧米では学力の土台となるものとして注目されています。アメリカの教育ジャーナリストのポール・タフ氏は、「将来幸せな人生を送るためには『非認知スキル』が大切である」と語っています。IQなどで数値化される「認知能力」と違って、目には見えにくいけれども「学びに向かう力」や「粘り強く、友だちと協調して取り組む力や姿勢」などが大切だということです。例えば国語の勉強で考えると、漢字や文字、文法という知識を使い、文章を読んで内容を理解するなどの「認知能力」が求められます。しかしそれだけでは不十分で、理解できるまで根気強く勉強を続けたり、友だちと協働しながら理解を深めたりといった「非認知能力」の支えが必要です。ですから、認知能力と非認知能力とが相まって成長していくことを目指していくことが必要なのではないでしょうか。がまんする心、何かを最後までやり抜く力や好奇心、誠実さ、自分をコントロールする自制心などが、目に見える学力を伸ばす助けになり、社会を生き抜く力のもとになることを念頭に置いて、学校も、家庭も、地域も、子どもたちの教育に手を携えていければ嬉しい限りです。

中学生プロ棋士の藤井聡太四段が、歴代単独1位となる29連勝を達成しました。偉業達成も素晴らしいことですが、あの若さで、最後まであきらめない強い心を持ち、礼儀正しい態度や自分を冷静に見つめる自制心などを身に付けていることに感動を覚えた方も多かったことでしょう。聞くところによると、幼児期に「非認知能力」の育成を重視した環境にあったそうです。参考にできる点は、私たちの子育てや教育の指針に生かしていきたいと思います。